

Title	W・ジーママン著『最近のソビエトの国際関係論』
Sub Title	William Zimmerman, "Soviet perspectives on International relations, 1956-1967"
Author	中沢, 精次郎(Nakazawa, Seijirō)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1969
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.42, No.12 (1969. 12) ,p.149- 151
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19691215-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ある。

総じて、本書は紛争にたいする科学的アプローチとして、学界に新分野を切り開くという先駆的意義をもち、その内容が斬新であることについては異論のないところであらう。今後著者の見解が我が国に紹介されることを期待するものである。

(内山正熊・日向精義)

William Zimmerman,

‘Soviet Perspectives on International Relations, 1956-1967’

Princeton University Press, 1969, pp. 336.

W・ジーマン著

『最近のソビエトの国際関係論』

国際関係論関係の書籍、専門雑誌、あるいはまた国際関係を対象とする研究機関の戦後の合衆国における異常な増殖現象から、A・グロッセが、一九五六年の論文 (Alfred Grosser, “L'étude des relations internationales, spécialité américaine?” *Revue française de science politique*, Vol. VI, No. 3 (July-September 1956)) のなかで、国際関係論は特殊アメリカ的な学問ではなからうかと訝っている

が、「もし彼が一九五六年にもう一方の超強大国であるソ連に注目したならば、国際関係の研究が明らかに回避されていた点こそが、この国の学問研究の特徴の一つであつたことに気付いたのであらう」(二五頁)と、A・ジーマンの『最近のソビエトの国際関係論』はその第一章で述べている。

ロシア革命の成立は、西欧的な民族国家という政治の文脈のなかで機能する社会・経済的な体制に焦点をおいた伝統的なマルクス主義に一つの課題を提供した。垂直的、階級的な次元で構成された闘争の概念は、水平的、国際的な次元に適用し得るようになり、「創造的に発展」させられねばならなかつたわけである。しかしフルンチョフ以前の段階では、『社会発展のコース』を決定する優先権が、『各国の経済と政治の領域に見られる、生産諸力の発展とか階級闘争といった国内的な過程』に与えられていた(四頁)。世界史の発展過程において国際関係の果す役割は第二義的のしか評価されていなかつた。スターリンが理論のコールフィアスとして君臨していた時代には、外交問題あるいは国際政治を扱つたアカデミックな研究も『一九三三—一九四四年のジャコバン党下の共和国の対外政策』とか、『一八七〇年代の国際関係とドイツ統一時代(一八六六—一八七〇年)のロシアの対外政策』といった無害な題材(三〇頁参照)を選ぶことに苦心しており、また国際問題の解説者は官製のイデオロギーの宣伝者としてもつばら機能していたのであつて、国際関係が、歴史学者あるいはイデオロギストの手を離れ、独自の研究分野として登場したのはさほど古いことではない。一九五六年の第二〇回党大会

以後のことであると、ジーマンは見ている。

もつとも、彼は、最近のソビエトの国際関係論的な文献をただ羅列的に紹介するといった作業には満足していない。国際関係論の対象領域については、一方ではJ・モーゲンソーに、他方ではQ・ライトによつて代表された主張を両極とするさまざまな論議が存在しており、また「スタンレー・ホフマンが『国際関係の理論は異なつた高度で異なつた方向に飛ぶ飛行機のようなものである』と指摘しているように……」(二九頁)、方法論についても研究者によつてさまざまであるが、「最近、アメリカの国際関係の専門家が唱えている理論構成への諸提案を参考にすると、国際関係についての個人あるいはグループの所説、この場合はソビエトの国際問題解説者の所説を描写する際に基準として役立つ一組の問題点、いわば語形変化表を提示することができる」(二二頁)として、まず、ソビエトの国際関係論的な思考と所説の分析方法を明らかにしている。では、この語形変化表に記載されねばならない変化項目は幾つであるのか。項目は三種類であつて、その第一は「国際的な体制の構造」、その第二は「この体制に關与しているアクターの姿勢」、その第三は「体制の変化の速度と方向を左右するプロセス」であるという。これらを疑問文の形式で表現すると、たとえば「ソビエトの国際関係の専門家はいかなる実体を国際関係のアクターと認めているか」、「アクターとしての国家、特にアメリカをどのように評価しているか」、「どのようなかたちで、またどの程度まで、バランス・オブ・パワーを特定の国際体制の特徴と見ているか」といつた問題であり、一

方はマクロの、そして他方はミクロの前二者の問題の分析が「第二次大戦後の国際関係に現われているような、さまざまな国際体制に共通したプロセスとパターンについてのソビエトの評価の分析に不可欠な背景をかたちづくる」(二三頁)と理解されている。『最近のソビエトの国際関係論』の各章がこのような観点から配列されていることは指摘するまでもない。序論的な第一章につづいて、第二章では、国際関係論がソビエト社会科学の一分科として登場してきた過程を明らかにし、第三章では、国際関係のアクターに關するソビエトの専門家の所説を整理する。第四章は、今日の国際秩序のピラミッド的なパターンについてのソビエト的な思考を解明し、第五章は、二大強国間ないしは二つの体制間における力の分布についてのソビエト的な見解を分析する。ソビエト側から見たアメリカの対外的な姿勢を第六章で、また第七章では、生存——現国際体制の維持——と革命——現国際体制の変革——という矛盾した二つの課題に対するソビエトの態度、特にその変化が取り上げられており、最後の第八章は、ソビエト対外政策の解明と予見のために第二章以下で指摘された素材と展開された記述を要約している。

ジーマンの『最近のソビエトの国際関係論』の構成は以上のようであるが、彼の著書を紹介するにあつて、この研究が、アメリカを中心として発達した国際関係論への反省とソビエトの対外政策の本質的な問題の解明への情熱に支えられていることを指摘しなければならぬ。核時代の国際政治すなわち米ソの二大陣営に分裂した国際社会を対象とした「西欧の国際関係論が、過度にエスノセント

リックであり、国際政治の比較研究の発展に十分な配慮を与えていない」(八頁)という反省から、彼は、国際関係論の比較研究を可能とするような類型の定立のための素材の提供を企画している。しかも、彼はまた、ソビエト対外政策の研究が対決しなければならないその基本的な問題点、特に「マルクス・レーニン主義イデオロギーとスターリン以後の対外政策との関連」についての解答(特に二九一頁以下参照)も用意している。したがってそれは国際関係の専門家にとつても、ソビエトの研究者にとつても貴重な存在となろう。

(中沢精次郎)